古里の「今」伝える

震災・原発事故から10年。復興の動きを取材し、発信したジャーナリストスクールの参加者

ジャーナリストスクール

2021年10月30・31日、11月14日

相双地方、いわき海浜自然の家、富岡町文化交流センター「学びの森」

小中高生 新聞作り

復興に励む人の思い取材

福島県の子どもたちが東日本大震災、東京電力福島第一原発事故から10年を経た相双地方を取材して新聞を作る「ジャーナリストスクール」は2021年10月30、31日と11月14日の3日間、双葉町や富岡町などで開かれた。小学5年生から高校2年生までの12人が参加し、福島の今を伝える新聞を完成させた。

子どもたちは3班に分かれて活動し、初日は東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町）、大堀相馬焼協同組合（浪江町）、日本原子力研究開発機構（JAEA）楢葉遠隔技術開発センター（楢葉町）、NPO法人富岡町3・11を語る会を取材。写真を撮りながら懸命に復興に取り組む人たちの思いを聞いた。

2日目はいわき海浜自然の家（いわき市）で地元新聞社の記者らの助言を受け、新聞作りに挑戦した。取材で得た情報を基に記事を書いて、見出しを付け、紙面をレイアウトして製作した。アイデアを出し合って独創性あふれる題字も考えた。

最終日は富岡町文化交流センター「学びの森」で、地元住民らに新聞を披露した。活動で学んだことを堂々と発表し、「私たちが福島の復興を見届ける」「福島の今を発信し続けたい」などと語った。

ジャーナリストスクールは「震災・原発災の経験・教訓、復興状況伝承事業」として福島県、ふくしまの学び実行委員会が主催し、今年で9回目。福島民報社と福島民友新聞社が特別協力した。

記者の心構えや新聞作りのこつをアドバイスする池上さん

池上彰さん特別講師

最終日の発表会にはジャーナリストの池上彰さんが特別講師として参加し、子どもたちが作った新聞を講評した。

それぞれの紙面にじっくり目を通し、「着眼点が素晴らしい」「読む人の立場になって易しい言葉に置き換えて」など優れた点や改善点を指摘。「取材を通して福島で何が起きているかを学んだと思う。私たちが福島の復興という歴史をつくっているという思いを持ってほしい」と呼び掛けた。

「ジャーナリストとして最も大切にしていることは人間らしさを失わないこと。特ダネが欲しいからといって人をだますようなことは絶対しない」「取材し報道することによって世の中が少しでも良くなるように願って仕事をしていた」など、子どもたちの質問に答える形で自身の信条や報道姿勢も明かした。

本事業は被災者支援総合交付金と福島県東日本大震災子ども支援基金を活用しています